

日本特産で四國を原産地とする「タチチカウチンゴケ」が九州に産する事は考へられない事はないが、まだその報告がない様である。昨年の春(昭和九年四月廿三日)肥後市防山に於て *Mnium* の大形のものと思つて採集せるものが之であつた。古い *Sporogon* が澤山についてゐた。

抄 録

ハッチンソン氏：— 顯花植物 第二卷 單子葉植物 (J. HUTCHINSON: The Families of Flowering Plants, vol. II. Monocotyledons 1934)

著者が第一卷双子葉植物を出版せしは 1926 年で今回第二卷を著し、裸子植物は *Kew Bulletin* (1924) に掲載したれば氏の顯花植物は漸く完結せり。

氏は單子葉植物を以て 單元系統のものと思ひ、即ち双子葉植物中の多心皮目 (*Ranales*) を先祖として單子葉植物中、離生多心皮、多雄蕊を有する沼生目 (*Alismatales*) 及びトチカマミ目 (*Butomales*) を生じたりと考ふ、前者にはオモダカ科 (*Alismataceae*) シバナ科 (*Scheuchzeriaceae*) サクラキサウ科 (*Petrosaviaceae*) 後者にはハナキ科 (*Butomaceae*) トチカマミ科 (*Hydrocharitaceae*) を屬す。

單子葉植物の多くと毛茛目とは共に 胚乳を有するのは通則であるのに最下等の二目は之を有せず、氏は胚乳のあるを以て原始的の性質と見做すを以て之には少らず困却せしものゝ如く、此最下等二目に胚乳なきは水生植物の故なるべしと云へり、氏は胚乳を以て *Prothallium* と考ふるを以て、かく云へども被子植物の胚乳は卵受精後の重複受精の結果生じたるものなれば下等のものは却て之を有せざるべく、裸子植物の如きは一般には重複受精の事なし、されば毛茛目と同一祖より出發して以上の二目は多心皮多雄蕊の程度の低いことは進んでゐるが胚乳のなきは却て毛茛目よりも原祖に近き原始的性質を保有すと抄録者は考へる。

沼生目より先第一に同被花綱 (*Calyciferae*) を展開せり、同被花綱は二輪の同花被を有し多くは水生又は濕地生にして終に花被の退化と單性花の方向にすゝめり、即ち本郷草目 (*Triuridales*)、*Juncaginales*、レースサウ目 (*Aponogetonales*) と進みて終に茨藻目 (*Najadales*) を以て寧ろ退化に傾けり、又一方ツユクサ目 (*Commelinales*) より鳳梨目 (*Bromeliales*)、トウエンサウ目 (*Xyridales*)、ホシクサ目 (*Eriocaulales*) を經てシヤウガ目 (*Zingiberales*) に到り最高等となれり。

一方トチカマミ目よりは先づ原始的の百合花目 (*Liliales*) を生じて遂に両被花綱 (*Corolliferae*) を展開せり、即ち本綱には進化の経路をたどる蘭目 (*Orchidales*) とア

ヤメ目 (Iridales) に到る二系とガマ目 (Typhales) とアダン目 (Pandanales) の未成退化偽花群の他に偽花形成に成功した天南星目 (Arales) は百合花目の穂状花序と漿果とを有するバラン (*Aspidistra*) を先祖として起れるものなるべし。

第三綱は穎花綱 (*Glumiflorae*) にして百合花目より燈心草目 (Juncales) を介して莎草目 (Cyperales)、禾本目 (Graminales) を展開し以て別途の偽花群を成せり、今回氏の着眼點の最も從來と異なる處は從來の百合科を以て異系混合と考へ石蒜科との關係に於て、兩科を分つ要點は雌蕊上位、雌蕊下位の點にあらずして却て莖状花序軸を有する繖形花序を有するや否にありとなし、從來百合科に入れしネギ族 (*Allieae*) を石蒜科へ編入し、又エンレイサウ科 (*Trilliaceae*)、サルトリイバラ科 (*Smilacaceae*)、ナギイカタ科 (*Ruscaceae*) を百合科中より獨立せしめたと同時にリウゼツラン目 (*Agavales*)、キンバイザサ科 (*Hypoxidaceae*) を石蒜科より分離獨立せしめたり。

それで單子葉植物は總計二十九目、六十八科に分類された。第二卷は第一卷と異り各科中には皆悉く各屬を配し分類してあるが唯蘭科と禾本科は全部各屬を配するには到らなかつた。(G. KOIDZUMI)

ハンデルマゼツチ氏：—**秦樹科** (H. H. MAZETTI : — *Chingithamnaceae*, fam. nova, in *Sinensia* vol. II. no. 10, 1932, p. 126, Fg. 1-8.)

1928年十月十九日、秦仁昌氏は支那廣西省、邕寧府の南方 *Sh-feng-da* 山千米突の森林内にて秦樹屬 (*Chingithamnus*) なる一新屬植物を採集せり、ハンデルマゼツチ氏之を研究して一の新科を設立せり、秦樹科 (*Chingithamnaceae*) である。

花は輻状相稱花、四輪生、異數を以て成り、一方の不發育の爲めに両家花なるものゝ如し、兩被花にして、雄蕊列は一輪、雌蕊周位花なり。花床は倒半圓狀にして、直徑二ミリ半なり。萼は五枚の離片萼より成り花床の縁に覆瓦狀に着生し永存性なり、各片は圓形にして徑 2 mm. 縁邊には腺毛を生ず。花冠は五の花弁より成る、各片は卵形にして長さ 3 mm あり、長き爪を有す、萼片に對生なるものゝ如し。雄蕊は五ヶ萼片に對生なるものゝ如し、花床圓縁に近く突出せる環輪上に座し、藥隔は先端微小突起あり、内向裂開である。心皮は二ヶ全く合一す、子房は半上生圓錐體を成し、一室殆んど花柱を欠き柱頭二ヶ三角形に肥厚す、胎座は子房室底の中央にあり、四ヶの倒生胚珠直立し、珠柄の通導は内位、珠皮は二枚である。蒴は橢圓體にして長さ 2 cm. 硬き革質にして表面に多くの線條あり。種子は一ヶ底着直生の橢圓體にして長さ 11 mm. あり、外種皮は光澤あり、胚は直、胚乳は多量である。無毛の灌木にして枝は双又或は三又分枝をなす、芽は頂生にして交互三對生の芽鱗片を有す。葉は永存